



里見八犬傳 第六輯 卷四



13
709
29



門 13
 號 709
 卷 29



明治三六年
 十月九日
 購

南總里見八犬傳第六輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第五十七回 對牛樓は毛野讐を塵ふ也
 墨田河小文吾船を迷ふ

却説犬田小文吾八且閑野が又垣とうち越てをやくも母屋へ還りて。そが
 要時自送りて躰て臥房ふ入る。かど心おねぬ翌のうさゆわても且閑野八田樂
 愧儡は清稀の男魂あるのをかくて百歩あまのりゆかざる築垣のほとりあり。
 釵見をりて季六を撃つ。たのしき煉とひ飽きてこれを舞へる。心探の華々
 けよ今圖らばも彼以女の資ふりてこの処を脱れざるをば海月の骨あわみ
 中もあまのり得ぐら幸ひあつたれども常武も亦檜州の敵みやもあつたれ。
 城門出入の符牌をどぞ等閑中と盗まんや。事事成らば且閑野八命を

八犬傳六輯卷四

南總里見八犬傳

其処小隙をべ。情慾といへど俠氣ある可惜以女と見れば多し喪へり
不便とのそ今ゆ術由なり。女々しく物を多んり。彼我が運を天子任し
翌の便宜と俟を。とある果一宵の夜の明け五月十五日。この日朝あり
雨降る。比より末の比より天霽なり。小文吾の心よがる。季六が撃れり。を
常武をやく。猜一かバ多勢をり。これを撃るべ。今や討むは。秋として
刀の寝刃を磨く。終日油断せり。も男童ホが三ふ人の飯を運ぶも
日。ろ小異あるを。くけ。あ。ろ。かく暮ふけり。故ある。常武のいゆる日對
牛樓まで小文吾の密謀を告て相譚ひ。絶え兼引氣色かけられ。只
速に結果く後の患を除んと。且男童ホよろろゆさせ。日毎々々
小文吾が為体を窺せ。九十日あり。を經る。小文吾ハ夜と。日と。於
用心に隙をり。程。ゆる。は。倦疲れて。より。熟睡する。とあり。と彼

童ホが報。一。六。扱。心。や。せ。一。と。て。竊。よ。ト。部。季。六。と。り。一。夕。小。文。吾。を。撃
せんと謀り。一。次。の。日。至。り。も。季。六。ハ。か。へ。り。來。む。還。る。小。文。吾。ハ。恙。も。か。て
幹。浄。房。よ。を。り。一。か。れ。バ。常。武。の。よ。く。疑。惑。あ。く。又。男。童。を。り。密。々。は
彼。処。の。や。う。を。窺。せ。一。曲。演。の。ほ。ろ。勿。草。葉。お。塗。れ。鮮。血。あ。り。又。曲。演。の
水。常。は。真。り。て。薄。紅。な。り。き。と。報。一。六。常。武。頻。り。太。息。を。吐。く。肚。裏。は。多
や。原。來。昨。夕。季。六。ハ。返。撃。せ。れ。小。文。吾。が。そ。の。死。骸。を。水。に。沈。め。て
隠。せ。り。か。ん。れ。を。死。骸。を。穿。鑿。し。て。人。殺。の。罪。を。め。く。小。文。吾。を。撃
せん。幾。十。人。を。り。も。く。也。と。も。自。亂。も。れ。を。非。と。し。て。咎。め。あ。ま。し。か。り。ん
じ。と。や。撃。せん。か。や。せ。べき。と。要。時。肝。膽。を。推。く。め。の。ろ。ろ。こ。の。日。五。月。十。五。日。ハ
そ。の。子。鞍。我。吾。が。誕。辰。あ。る。を。め。て。年。毎。小。城。中。多。甲。し。を。招。聚。合。て。壽。の
席。を。開。け。酒。の。遊。ぶ。吉。例。あ。れ。バ。巳。と。を。ゆ。む。小。文。吾。を。擊。捕。る。一。錢。ハ

八代傳六編卷四
二
編輯堂藏

あきて 明後日よ延して。この日午の比及より賓主盃をめぐりて歡びを盡し。
あさけの 且閑野が田樂能は各々奥を催を程は長城日々遊び足る燭を
つ 焼げども尚飽むその夜子二の比は至り客の漸きは歸去とある
おやこ 親子主後の泥の如くは醉ざるめを或は臥房は倭燈火入り或を
とろく 処々倒る 鼾睡の音ハ枕を争ふ田野猫も置しく前後も知らぬ
ふ 臥しつらなる。此れは又小文吾の母屋をかる醜會のありとも知らざれば
ひる 昼ハ終日ゴウ人ハ討みや事と油断せむ日暮てハ且閑野がさの心
あはれ かければ或ハ外に出背門立。身垣は耳をきせて彼方の容を知らんと
まろふ 對牛樓吹とおぼしめて笛鼓の音はえ一六原來今宵も酒宴
ありと 舞う。遊ぶをよ折られ且閑野ハ符牌を奪ふ便や
ゆる。いふと。夏程は夏の変を多く更蘭又音曲のあつべもさる。

寂寥として夜風涼しく樹間々々を照らす月影のそを明かりける。
そのと 當下小文吾の舊所ハ退れしゆ又あやう。今宵且閑野がさの
成。成るるハとあれかまれ。あれ程はあて約束あつるは用意もせむ。
まよ 實は死ぬものとあべー。行包と笠より外は身は添ふ物ハあられも既ハ時刻の
ちり 近づぬん。準備をせむと遽しく物より集り裳裙を結ぶ。三尺
ての 自拭楚と結びて脚絆を着る。腰は放さぬ中刀のさし。往方ハ定む。
たち 大刀引提く縁頼は立出さる。望月の西は近づく影清と曉報の鐘の
声教僕かれハ四更あり。時ハ母屋のうへ當り。頻りふ人の叫ぶ。
ど。如く踏鳴らむその足音さふいと出さる。小文吾耳を歌て。夜ハ
あさけの 且閑野事成らば。見答らる。捕らる。然らば酒在の闘争は
ひの 心ゆら。いふと。夏程は夏の変を多く更蘭又音曲のあつべもさる。

心を碎くして九半時許中して物の音ハ静りぬ彼垣一重ハ隔りてこと
 とくべくもあぬ身ハ靴を隔て癪と搔くよあひその色も届くぬ似たり幾今
 且岡野ハ捕られられどそこれ愁々命と捨て救んと欲せるとも敵射と結
 魚の市は向ひ鹿鹿と肉粗の上は憐む不似てその甲斐あつらんよあも栗小
 大事と任して可惜烈女を殺さるべしこれ恨まわやまるとおとらぐらわつ縁
 類は尻つちか母屋のこことあつてつくとあをそり浩処不あをこの庭を松と
 傳わく築垣を跳越つ鴉鳥の如くあをへ走りまゐりのあり小文吾亦復甯
 うち騷然とく且岡野吹と呼かる程もあつた且岡野ハ茶を黒髪壁に
 衣不鮮血の韓絳右も大明晃々る氷の刃を技會て左も不物を引提つてま
 走り近つて大田主マ々々まを六待りひひけぬ辛トて約束の符牌ハ泉
 入りたり是是是といひけく縁類へ投出せを小文吾ハ詔あつて裡より

光る燈火と天ノ隈を月影よ引りてそれハ符牌はあををひひけぬ
 馬加日記常武が首級ありければあをくつとを騷然と先その手を諸君に
 且岡野莞尔とうち笑ふ縁故と告ぐられ疑惑ハ寔に埋り吾侪ハ素
 あり女はあつた今ハ何とう隠むべき往時寛正六年冬十一月馬加常武が奸
 計の誘詐に陥られ龍山逸東太妹連下懸れたる千葉家一族の老黨
 有りける粟飯原首亂度が透腹見ハ吾侪をく大坂毛野胤智と名をいひ
 浮世を潜ぶ女田樂俗字の毛野を象りて且岡野と呼くは縁故
 あつてをり世の風声不変れり父の正妻名ハ稻城を兄衆懸原愛之助
 幼穉より姉玉枕に至るも常武が為に皆喪れ親戚も連坐の村を蒙り
 家系俸祿断絶せしあり十五年の月日と経たり母ハ父の妻やうく
 名を調布と呼れり有身より三歳まで産の紐を解りければ知音

醫師亦相告て血塊と云ふあり。辛く命を助け、かくて馳て追放せしむなり。
 かくく由縁を心あふ相摸州足柄郡大坂の里に落函りく。その年十二月
 安らふ吾侪を分娩しぬ然れども十葉家よばえを憚り女の子と人あは報之
 にか名を毛野とつけしれ。兩三年の程や、貯財も竭果し、母ハ吾侪を死
 抱死つて竊し其処を立出て鎌倉へ赴くぬ。世渡る便着あはる。
 母ハ只俳優の藝と拍子妙あり、女田楽ホ雇れてその技をゆくともかく。
 吾侪とて音あひりお知れ、馬加し知られどして八九歳の比より、吾侪をも
 亦田楽の隊に入れ、旦暮は技と習せしれ、かば熟るより易に遊藝の人あは、
 且閑野とめて、難く不便趣合かくてゆく。その月日を送る、年十三
 あり、秋憂より積る母の大病頼とま、かくええ比吾侪を枕辺に近づけて
 ん身が素生ハ如此と々と親のふり、兄弟のふり、馬加龍山、両箇の宛家の

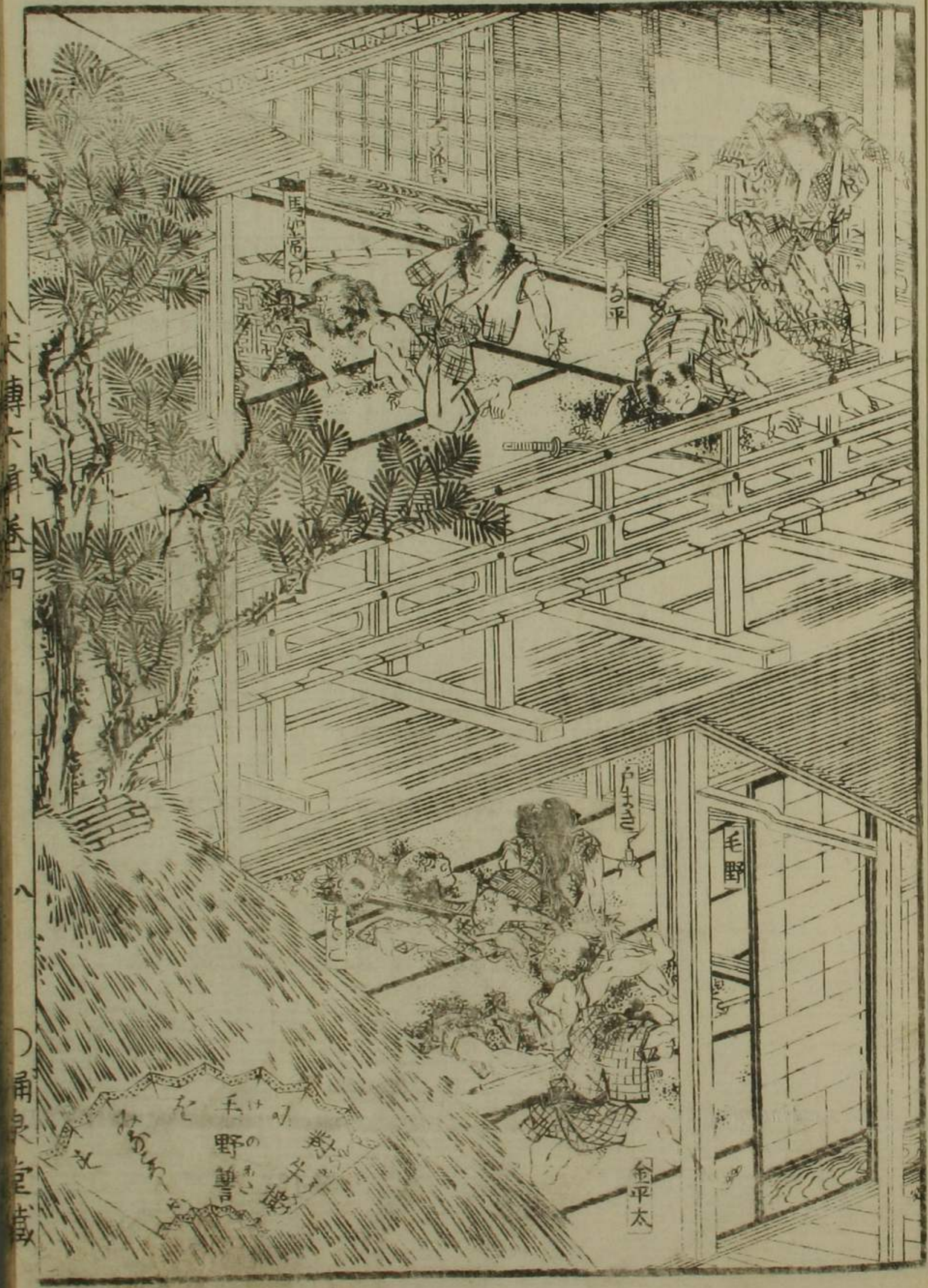
事の送送もかく告られ、より浅事く、を悲しく、朽とく、ゆで両箇の
 警敵を撃て亡父より向む、これ人の手と生れ、甲斐や、縁連を往方ハ
 あれね、常武ハ今もあは、石濱の城はあ、先常武を警捕、後よ縁連を
 索んぬ、この時ひ決や、かとも母の看病は暇なれ、且、時を俟程よ
 哀れ、乳女ハその年の冬、身あ、ぬ忌ども、既、園、あり、この石濱へ赴、
 いうを怨を復さんとあ、甲斐加、此の刃の生、育輪鼓品玉、綱渡、或、今、
 田楽舞の外、あ、術もあ、大刀、技、術もあ、大敵を撃んと
 か、あ、心、復、讐の時を延、田楽の技、假、花、夜、
 ひ、習、覚、自得の武藝ハ、術、法、鎗、薙、刀、銃、鏡、組、懸、鎌、鎌、誰
 誨、あ、ね、心、を、師、と、せ、自然の煖煉、既、三、年、及、び、神、物、有、て、か
 術、を、祐、ら、と、あ、り、自、我、一、流、を、究、め、り、父、祖、ハ、千、葉、家、の、一、流、之、家、系

正し親武士あり。これの功あり俳優人とあつた。男子と
 生れぬ。女子とあつて世を渡れる。人間の不幸これなまはぬ。かゝりともども。
 又これの功あり。彼常武も近づく。宿望を遂る日。此は終つて。
 あるをよけれ。あひえし心。あつて毎日の變化。粧物のひびく。進止。あつた。
 女子のあつた。近づく。女田樂の。下隊と列立て。この地。あつた。誠心の
 致す所。天助空。く。求む。仇人常武。招か。心。廿日。母屋。近づく。
 程。人傳。あつた。和殿の行状。世。稀。あつた。勇士。あつた。捨殺。あつた。あつた。
 しが宿望。遂。日。相伴。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
 釵兒。座。迎。送。と。これ。と。試。爾。後。桃源。の。歌。を。ゆ。く。相。憐。む。の。意。を。示。し。又。昨。日。
 常武。が。若。黨。季。六。と。刺客。と。と。和。殿。を。害。せ。ん。と。謀。り。し。と。これ。洩。は。せ。て。迹。を。跟。け。
 あ。の。藥。垣。の。ほ。ろ。り。あり。釵兒。を。ゆ。く。あ。の。ま。ま。季。六。を。擊。首。と。り。さ。る。が。折。

艶語をゆく相譚あり。情を示して。ゆき。和殿を。試。し。小。色。迷。ぬ。大。丈。
 夫。樹。下。惠。中。恥。る。と。か。今。い。か。う。と。あ。ひ。え。し。滅。の。符。牌。不。假。托。く。約。束。あ。つ。た。
 親の。誓。言。を。替。捕。ら。ん。夜。不。相。伴。く。走。り。去。ら。ん。と。あ。つ。た。天。の。う。ら。ね。時。あ。つ。た。あ。つ。た。
 鞍。弥。吾。常。尚。が。誕。辰。の。壽。祝。と。主。客。酒。宴。日。を。消。し。真。夜。中。比。は。帯。を。
 収。め。來。客。ハ。皆。退。死。去。り。常。武。親。子。主。従。ハ。彼。此。ハ。醉。臥。し。り。今。宵。怨。を。
 復。さ。ぬ。何。の。時。を。期。す。死。や。と。て。隠。し。指。さ。利。刀。を。竊。し。引。提。て。窺。へ。常。武。
 父子。綱。平。亦。ハ。對。牛。樓。ハ。假。寐。せ。り。先。を。這。奴。亦。を。擊。ん。と。と。登。る。階。子。を。潜。
 り。龍。の。蜚。颺。を。ゆ。く。心。地。に。潜。が。寄。り。常。武。が。枕。邊。直。立。く。天。地。不。變。言。け。と。
 声。高。や。ら。ふ。馬。加。常。武。と。く。覺。よ。昔。年。汝。が。諺。訴。ふ。あ。く。杉。門。路。を。登。り。ん。と。
 栗。飯。原。首。亂。度。が。妾。孕。あ。つ。た。腹。見。相。撲。の。天。坂。老。生。れ。く。その。里。の。老。家。跡。を。
 登。り。大。坂。毛。野。亂。智。あ。つ。た。あり。親。の。誓。言。兄。姉。亦。の。怨。を。復。せ。今。曉。目。今。起。る。

勝負を決せむと名告り呼見して枕と礮と蹴て丸が常武忽地駭死
 覚く臂近かりける腋挿の刀を合く抜んと身を抜も果は丁とうの刃は牙
 常武が首は赤う向へ落く餘る刃尖立る膝の骨をくけぞ所よりけり左右は
 中へ鞍弥吾綱平齊一覚くうち駭死杖へ痛者脱さどと共小刀を引抜
 打振り勢へとほるを右の受左は拂ふ奮撃突戦乙と畫く鞍弥吾が刃を長
 哩と聲落其駭驟く逃んとしる背をぶく劈て仰反ことちを横ぶる小所
 ちあつる腰車やちあつて仆さるこの大刀音は女房戸牧ハ驚死覺く要時
 あつてこそ何みぞと呼掛々々登る階子のこをこあはは怯む渡部綱平刃を
 ひいて引く逃んとする撞見際も眼眩くくが助撃と名をひん戸牧を一大刀礮と
 破る破られ苦と叫びもあはせ階子の上より仰さる落る下あは女児の
 鈴子が母を慕わく起る母中々と呼けけるその頂の真中へ直倒は

墮く鈴子の母小頃骨を撲折れて矢庭に死し戸牧も共臥累りて
 忽地息絶てけり綱平これ心ははきけん呆迷く引返してゆては吾侪不
 殺く蕙を隻々難切に撃捕りてを樓上へ蹴もや残る奴原目も物
 せんとあつる小樓下より立て間毎の紙門蹴放せばも酔醒ぬ金平太老僕
 九念次貞九郎奴隷おのふ多勢と懸む短槍持棒貸刀得物々々や
 打振る足並取次お特人と競ふ縦横無導は追崩を群る羊の牧の中へ
 猛虎の衝て入る如く薄く負せし曰井の貞九が逃んとするを韓竹割返は刀不
 金平太が短槍を丁と破折く畳掛る合堂撃取期の十念九念次を教
 所の痛むは後燈々々逃るを透る背よりあひせける大刀風は血烟立てを
 死でける残る奴隷の幾人う僮僕もさ不逃迷ひて追詰らんと危厨の土間
 高く積る米苞の蔭に推合減合躲る程は遂に米苞を推顔して忽地



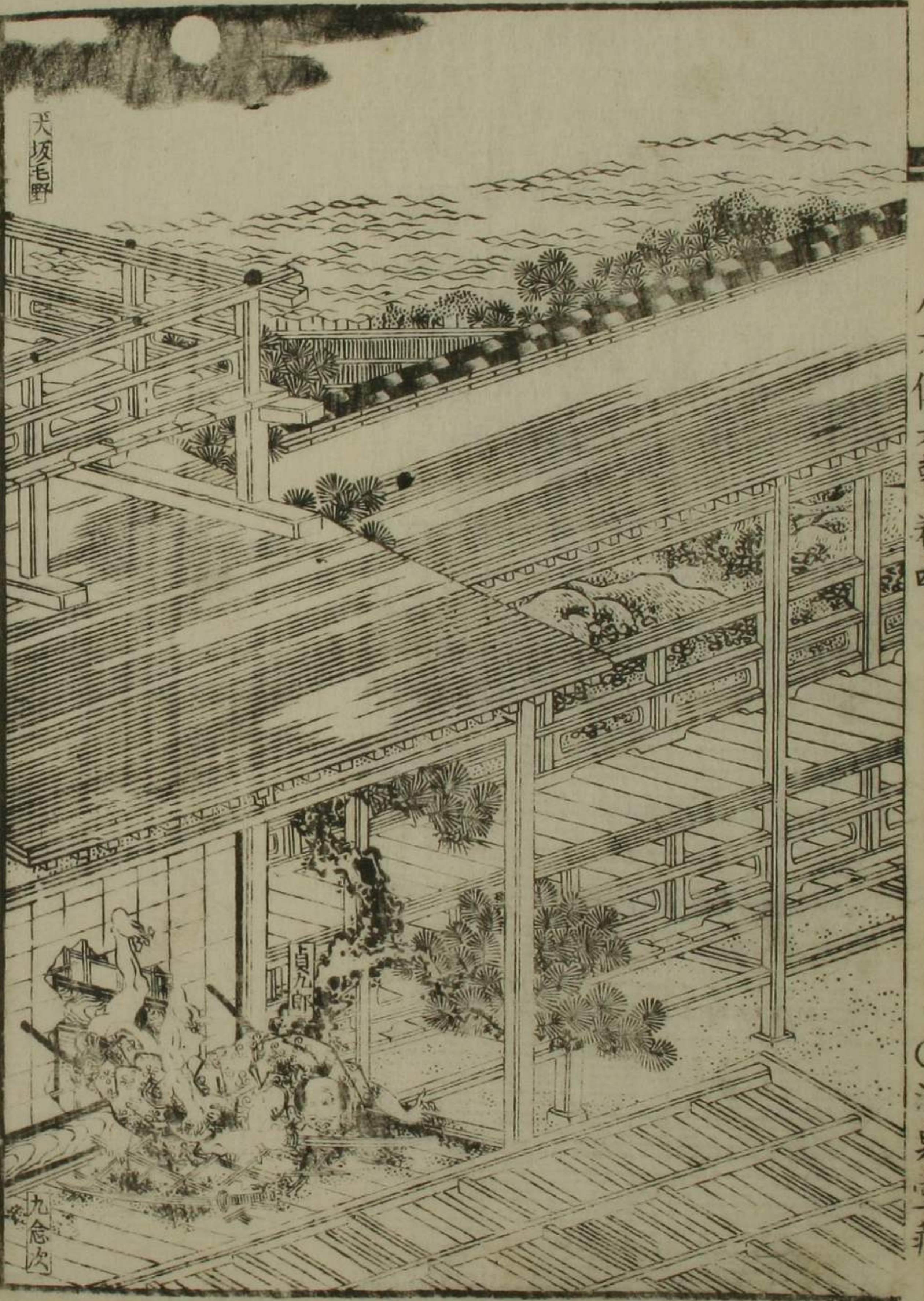
八幡宮

金平太

野の

金平太

野



天坂毛野

八幡宮

九念肉

九念肉

貞九郎

撞と墜かれが密張孔目の男童ホこれ撲れて目子飛出或は肩骨腰の
 骨撲ぬがれて自滅を取らぬ六七人及び残り残るも半死半生之隠伏て
 て合つて免さるゑと勸解しつゝの血益の殺生と云ひ捨つゝあまを
 撃つゆび樓上は走登りて仇人の血をまき傷の壁へ為父兄塵塵言為誓
 主鋤奸自今而後知君之為君勿使縹葛後倒羅文明十一年己亥
 夏五月十六日天粟飯原首胤度送腹子犬坂毛野胤智十五歳書と
 五十餘言を書留め馳て馬加常武が首級引提く事と息吹あむ説
 示せ小文吾の言く毎頻は感嘆の声をまじはれ初よりその言と行ひのん
 勿らぬと世有るは少女小女と云ひしは舟跡を扱人言は傳ゆる粟飯原
 大人の子なりしよ三歳永永胎内未生は毒害を避られも天孝烈の
 勇士と生れて寛と伸世と濟りせり一大奇変といふくのと御邊生年

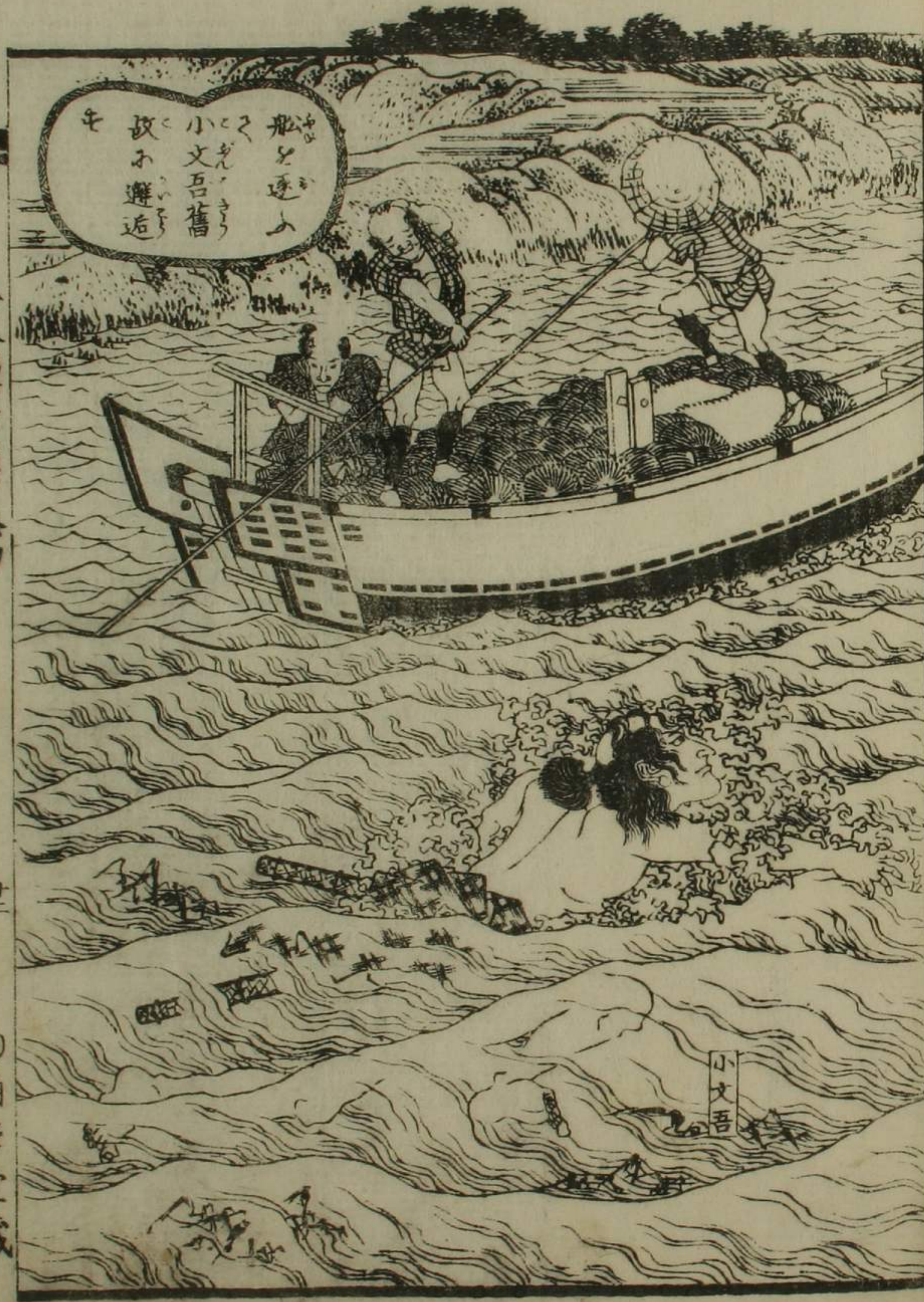
十五歳三年胎在りしと教て十七歳といふを人ども單身中七十數人の
 大敵と撃つ彈されハハ一へふの事さうも後の世は御有るさるべし
 べたのみも夥ありまきさうもまわれどあは清談の室はあはれ一歴々と
 夜と曉まは城兵ホ捕籠られ擲とあるの後悔あらんといふ脱れぬ
 路初御邊のあらうつふと問れても野へら領地某馬加許在り程
 夜毎は臥房とゆけて城の要害塹の浅深あり脱れ去らんといふその
 処をあく足究やう誘ふといひひて乱れ髪を推執ね仇人馬加常武が
 首級引よせて警と結合して腰は著裳と高く帯は夾を先立諸折片の
 笠木小花つたふかけて内と外面へをり立て輒く鎖を抜断捨てをを門
 扉を推開け小文吾ハその神速を感得舌を掉ひつこれ寔に及びごとと
 稱へく俱に馬加が屋敷と出く潜やうふあつれ立くやく程は毛野ハ豫て

足元を置ける搦手の東の土に樹柵深坑中に到り。この処に塹の幅も
 廣く柵を四圍ありあるべし。當下毛野の腰に著る準備の鈎索を取らば
 その索の端の処に懸丸を懸る物を附けり。杖の物を懸る索の端を去るべし。
 松は結苗の丸を握合て前面の水際斜に柵を揚を望み擲つに
 寛違をば其の幹へ丸を三四つかみ着て引結びるごとくふなり。ゆへに向へ
 渡るとして件の索は足踏をひて走りて向へ赴く平地をゆくより易かりければ
 小の吾類は感嘆して續ぎ渡るとも。太くもあぬ。一條の索は六足を
 引へくもわだ且呆れ且羞る舊所を躊躇するも野の迫ふこれを先か
 ぶる索の端をば其の揚へ結苗をゆびあかへ渡り其の天田に躊躇ふ
 ころ吾儕が肩よりあつとひひ背をさし向ける身より二丈もど大蛇
 小の文吾を輒く背負く徐々と索を踏んで渡りゆふ自若くと面色

変せむ小文吾まもく駭然感してむ。宇治河の戦ひに彼橋桁を走渡りて
 其の隨は大刀懸あけん筒井明春一求法師ホといふをもつてこれに優べにや
 と。不測の助けを歡びたりかて毛野の小文吾を渡り果て刀を引技此件の
 索を水中へ砍捨て天う仰ぎ東へをゆくあつとる小懸小陸地を走らば城の
 追兵を殺苗らん墨田河をう渡りて俱に進退を定むべしといふ小文吾
 諾をひて齊一踵を旋を折る城中猛不騒しく人數を集る木鼓の音はとも
 烈しくやえり。二人乞とえたり中やも毛野はうも點頭て察しつふ。惣
 漏せし常武が奴隸ホの告訴ありて城より駭の兵もてを俺們を獵
 索めく搦捕せんとするあり。その怖る不足るものやぬ。舟籠山縁連とふ
 一箇の雙言あり今や追捕の城兵と戦ふ何せん誘ふ共侶ふを逐く前岸へ
 渡せべしといふ小文吾一談よ及ぶ。それら然しをいふふれ。いごとく。後よ

あり先小立つて足をも小墨田河原に赴き渡舟を索る舟一艘もかりなき。
 あら武蔵と下總の堺川とを名中におよその水上に迫り秩父山より流れ来る
 末果一か死海と名づる坂東二の大河なる折しも降つたる皇月雨
 水炭増して波高く浅瀬に絶るかたの岸に繋る船もあつたお船
 河原を幾遍とめぐりて戻りて度よせし程天の空も明をわれく遙く空
 男入馬の足音塵埃を蹴立て奥々より毛野小文吾のこゝをへ追兵の
 既よ近つたぬ殺脱て陸をよふらん又この河を渡さん状とて必も水際小立
 在り浩処小千住のかたより流し随ふ柴船のおもこの岸を離るる僅ふ
 一及たりやと棹とり悩まうけり毛野小文吾ハ奔一うあてて天の祐とを
 抗るや霎時等便船せんをへ寄せと招けり頭をきて漕くゆく
 毛野ハ機をやく大駭怒りて憑む不聴ぬとやら舟賃ども今借人ぞと罵り

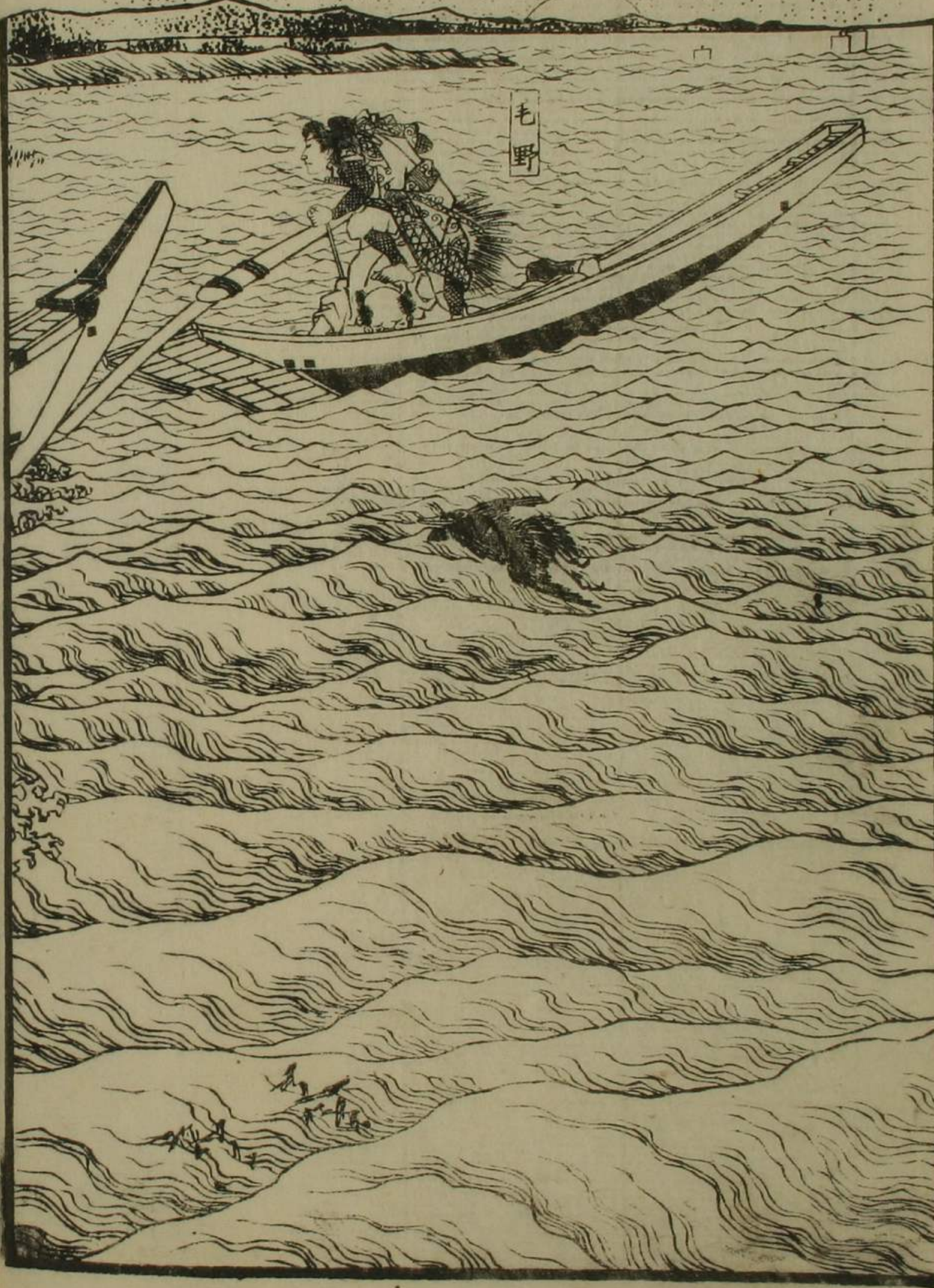
水際よ添きて下町をる追蒐れば舟人へのあざと笑きて棹とり収め
 艘を推立て漕船かんとほる程は毛野ハ閃と身を跳りて一及許隔りたる
 舟へ發動と飛入り舟人れ駭に怒り棹撻取て撃んとする物々を引
 外に怯むとを蹴仆して足下小楚と踏居て漕船さんとして艘を推せども箭
 ありも早に出水の勢ひ進退自由なさればあやも似て推流され川下遠くあり
 毛野のせ小文吾うちを霎時も堪は諸肌祖伝く魚衣の袖兼て両刀を
 挿る終は水中へ跳入り接むを切る人とも早れども流列り波高は行
 徳もりの塩漬不成長る水煉も遂に追着くとをゆむとも難義ふ及び
 折る物炭苞を積登りたる大平駄の船一艘千住のかたより漕来れり小文吾ハ
 辛くして伴の船の舷に身を掛り乗移れば西三箇の舟子共駭駭ぎ諸声
 あり立この竊盜奴が朝働は米物せんと彼不敵さま打や拵れと罵りて左右



八犬傳六輯卷四

十二

涌泉堂藏



八犬傳六輯卷四

涌泉堂藏

有撃んとほるを小文吾と名く身を翻して兩三四竿彼此へ追違へし舟擡の
正中諸より獲て撲倒し曳声うけて奪取る擡真額よ振揚て撃扱んと疾視へ
たる腕小携て一箇の舟長懸る声戦してや南古那屋の令郎公且く怒を鎮め
久と勸解つ只官禁めけりこの人を誰そ其へ下回し解分るとんぞ知らん。

第五十八回 窮阨初て解く轉故人小遭ふ 老實上家を續て舊憂を報

小文吾ハ怒小衆して嵩工ホを敷んとしつるとた多ひうけやくが親の家跡を呼て
禁つめのをとなれば是別人かた豫て相識る大江屋の高師依介ありけり
あわくいつよとをり小擡を身哩と投捨て絶く久し依介男縛急かれ擡摘て
先頼むべきまのといえこれ去歲より友の爲又身小とりもろち續たう大厄難小
奔走しつ刺このまろりむ依懸人小抑留せられて命も既小危かりしとある人の資小

よりてやうを脱れぬれども彼見よ追捕の兵小ハ西の岸よ立聚てゆりよを抗て
招くを小ハ怖る小足るものあなねどが再生の恩人の誓よあの流を潛下も柴舟小
飛乗てみづろ擡を取り推切 南のやえ赴たうそれ彼人小問ふたうもいハ
ちくほりたをえあるをあの舟中て別れ復遣人と難るべし舟子小ふとく分付て
件の舟を追してえまれも伴擡よ力を勤せんやよとくといそがせ依介ハあちを地へ
やうをく小身を起しつる舟子小せん久りて皆の衆よ今ゆりて如くこの郎公ハ日アあり
和主達も噂をりる彼行徳の犬田の大人あり今朝未明より故ありてれ小追れ友を
逐く馬河をいゆひらひがけやくを船小乗せ進らせしハ幸ひやぶ今ありて元の
程南のがへ赴たう柴舟のあをよまをハんを流りこれども衆骨折らば追りて
着人僉擡を推し存よ喃と辞せしくをア立てみづろ擡を取し舟子小ハ大男
二字小いゆく驚たもあちく怖れて誰うゆらび異様志き俺們ハこの春より大江屋小

ころ者共なれば凡之公と云ふたてて大く礼を仕りぬ免さるゝと云ふ勸解て
 奔一船を推し擢を操り声を合して漕ぐ程は然らざる流るる舟の端ハと
 追風なり瞬間は二三里をり品草澳も見るもふ南をこして連せぬ
 舟の舟の往方もあれを後より亦舟を追ひ来る敵もあつたりそのた依介ハ
 彼此をえとて喃古那屋の令郎公親しく商はるゝ高工の衆の腕限り小漕
 走のてあつて来つれど為のぬ柴舟ハ何処にけんんをさるかりありは彼荷の
 軽くて舟も亦細小ぢん不遠先ぢるものありハ旁一と功のたは技ありその
 且多し捨て僕ホと共侶は市川へ立ちよせむ行徳のり市川の為体を報あ
 ちる義あれど傷小人のまうれば船中であら盡しかたりはるをも去歳よりけ
 及ぶやん方のらへも安生舟ハ僕ホハ昨夕の夜船ハ乾鯛を干住へ横送り之
 灰船ハ大豆小豆の交易物を受とりまうけこの荷主ハ遠く後約束違は
 〇モトリス

不便あり先早飯を進らせん濡る衣を苞の上は披起りて乾かひひびく
 とひひの片隅焦るる木竈は鹿角折焼く茶を煎り細不入れる飯櫃の
 蓋撥除て盛りの蒸脂殻塗の二荒挽剥ても誠ある心の堅地わく心ま
 燗焼多油揚豆腐は粘着る浮炭を拂ふ火箸も木の端吹竹の節皿推
 ちる葛西茄子ハ紫の灰後れる糞状漬尻臭くかりぬ空腹の飢は夕四
 り添て精悍あけ小羞れども小文吾ハ心不かる犬坂毛野ハ別れより終不
 ありぞかりければ本意知らざる限りもあねど値偶も別離も時あれど亦
 ともまうた勢ひかの如く市川船ハ乗るも大江屋へも立ちよ今行徳へ入
 り親をさぬもの不似たりと云ふも難てと云ふなかりさる深念をいせ
 其の議は任せし依介ハ歡びて馳て舟子ハ如此々々とありぬさうの
 船を東へ推向く舟只管漕せざる小文吾ハ今依介ハ行徳のり市川の

為体報へ現る此ありといひとくは家をあらめり人夫あきぬりあを強て
 向んは心づかぬ心は安らぬ多う人夫不告りてひを不察しく落つるぬ
 船小任してゆく程よその日午の比及不市川小着一六依介ハ苞物と荷主の
 河岸よ水揚して船を大江屋の門邊ハ繫ね當下高工ハ船を引揚船を
 掛藏め宮を巻地庭をたて入るとて訛声高く散動おど裡面よりまうた
 女房の邊へく走り出て只今還りぬかひよりハ早うを起昼飯ううべく
 休ひぬへと旁へ船の枕家具と釜を引提て入り入るを依介ハやとて小舟の
 女を呼迫つけく水邊よ稀多客入あり茶をも疾煮て昼饌の準備をせむと
 何をか誘おへと小文吾が先お立つ興あり方禰室へとて案内をゆい正首ハ
 款待しるあるド態まらぬ方好が死小文吾ハ彼此とあしく頭を回し
 元れば原見一家あつ妙真ハ声も甚又大ハの親兵衛も何処に死んふと

知ればゆゆく心不訝とてとく向をたとる程ハ依介ハ一土瓶の飯茶碗
 とり添て小文吾が酒よりおめて是が泉月の猛霽中今茲の暑熱下あ
 かり小船で煮る茶ハ鐵氣沸く湯を止むべくもあはれ且これと利し召せ
 程か飯を進らばとて小文吾あへて否茶も饌も欲しけり大家ハ
 何処へおれぬひる親兵衛をも伴れり款嚮もあはれ為体と報んとしひとち
 何りぞとと向へ依介小勝を進めたまはれをそのすかれ忘れぬ去歳の
 六月廿四日の子あひやむ身ハ深く契りする友達を送ると武藏へ起ぬ
 あり日數歴れどもかひりぬ行徳老もあはれも愈最大う待ひて心をも
 かく思ひぬバ彼、大道徳とせんがまれば大塚へ起ぬ輝の要をを来ん
 とて七月二日の夕舟よ乗りて走りぬひりぬ亦約束の日數違之信
 知この故ゆを行徳の老家公も妙真さゆも曾安うら稀ハ蜚崎大人と左

らん右やわらんそ商量果一あつりけりかてその月五日のゆい。いん身も像て
あつてどいん彼悪棍の舵九郎があ親方夫婦のうへをその程お噂着て
衰躬は崇る推被端譚妙真さぬの入夫あらんあさびの岡の新墓を遺たて
守へ訴え辛抱えせんとも剛に難題傷へ人のあつりし六縛れかるとのひ
解難く死困ドめお折り文五兵衛さぬ共侶ふ蛭崎大人の事ゆひて是非を
わさげ舵九郎を撥擲投懲一と輝濟さぬ不似れども後難料りたけれは
蛭崎大人の意見任して妙真さぬと坊さぬ且く安房へ伴れて彼奴毒氣を
避んとてその噂昏不懸一と文五兵衛さぬ坊さぬを背負ひしつ途をよと
と精悍一と送りさ僕ハ亦要物の物多く納られる袱包と背よとつ
つ好くも主従五人宿所をさくゆく程不埋伏をる舵九郎殿計の悪棍許り
おと忽地路を横きると搦捕んと競ひ蒐るを蛭崎大人の引受て防戦ひ

あつてどいん彼悪棍の舵九郎があ親方夫婦のうへをその程お噂着て
衰躬は崇る推被端譚妙真さぬの入夫あらんあさびの岡の新墓を遺たて
守へ訴え辛抱えせんとも剛に難題傷へ人のあつりし六縛れかるとのひ
解難く死困ドめお折り文五兵衛さぬ共侶ふ蛭崎大人の事ゆひて是非を
わさげ舵九郎を撥擲投懲一と輝濟さぬ不似れども後難料りたけれは
蛭崎大人の意見任して妙真さぬと坊さぬ且く安房へ伴れて彼奴毒氣を
避んとてその噂昏不懸一と文五兵衛さぬ坊さぬを背負ひしつ途をよと
と精悍一と送りさ僕ハ亦要物の物多く納られる袱包と背よとつ
つ好くも主従五人宿所をさくゆく程不埋伏をる舵九郎殿計の悪棍許り
おと忽地路を横きると搦捕んと競ひ蒐るを蛭崎大人の引受て防戦ひ

諭る物も物とを養崎大人も文五兵衛と申の。あつあつの親共衛八神殿
 かくいふものも且とを養崎ありて然らば往方のあれはといふも船九郎と
 共信小藏もへもあつて返さる日と待たると頼もふ諫めあつてその宵の
 宿のふいせをせり。この時小僕にやうなぐ息をうらふ幸ひも度浅くられが
 妙真さあのかん伴とてと終安房も赴たつ文五兵衛さあこの夜より市川まで
 還りあひくかん身の安否をきんる夜船に乗て武藏も大塚へかん赴たぬ
 扱是事の一條のた下免僕にあつて。せ程経て後妙真さあの説させぬ
 久かく巨細ある言をゆり。さる程文五兵衛さあ次の日の巳の時をうらふ
 大塚の尋ねたり彼額藏と申を里人にも問ひし。不件の人罪決りて
 いぬ初めゆつるの日の庚申塚の海より刑戮せらるべかり。と額藏が友達
 大塚信乃も惣と三名法場を鬧して卒川菴八藤工社平小を斫殺し。

額藏を奪取て戸田の河身まで逃去を陣番丁田町進大勢をゆり
 追蒐捕詰ありふ大く早より六丁田氏八水中で敵の為を撃れり。然れども
 後詰の仁田山晋五が新隊を以推捕菴つ額藏信乃小を討捕りて
 その首級共を梟られ。この宵又癖者ありて番卒小を砍し一件の首級を
 竊取て往方もあれぬ。と又語る小膽を浅させぬ。文五兵衛さあ
 又歎けしをと思像りぬ。とをうりや。之かん刃の存亡定り不知るもの。あれは
 何なるげぬ。面色一マ件の里の旅宿して世の風聞を聞きぬ。彼梟られたる
 首級共ハ信乃もあつて額藏も。さか方人の戦歿する枯頭をりて云云と
 守を欺く仁田山晋五が伎倆とて密々小譏するもの。あつてより疑ひのめく解
 ぬ。その假首級何人か。と問ふ。と定りなれぬ。尚かん刃ありぬ。と
 め心さへ。さあ。苦し。憂宿小日どの。過しぬ。あつて。かん刃の安否も彼

ひらく。○あつひかりひらへ。○そこ入々と、大道徳の柱方を、其処小ありあると、おければ、逗留五日たり
 申す。○あつひかりその九日の夕つと、行徳は還り、あひつ相譚、敵もあつひの膝を抱きて
 ひらく。○あつひかり日を送らん、妙真との、も、蜚崎ぬ、も、縁由を報んとて、お、月日の十一日、
 安房へ赴た、あひたり、ゆを、お、身小恙なく、圖らむ、あ、ま、相伴来つ、歡、さ、
 つき、あ、つ。○あつひかり就て又ほお、あ、つ、も、いと、ま、う、の、叔も、お、身、去、歳、あり、何、処、や、居、あ、ひ、
 あ、ら、の、の、り、を、云、云、と、傳、へ、ゆ、せ、あ、つ、と、い、ふ、驚、く、小、文、吾、ハ、さ、く、り、毎、小、歎、
 息、一、つ、席、の、進、む、を、覚、ぬ、お、ま、お、と、あ、く、耳、を、散、り、忽、地、小、膝、を、破、と、拍、
 いら、れ、バ、飛、禽、の、鶉、の、嘴、と、齧、語、あ、ひ、り、の、仇、あ、る、や、去、歳、の、日、は、犬、塚、
 ら、お、ち、お、ち、武藏へゆ、れ、る、と、神、谷、河、原、の、ほ、り、や、く、焼、雪、積、平、と、呼、れ、ら、
 漁、翁、は、遊、遊、一、つ、犬、塚、犬、飼、共、侶、は、額、藏、の、莊、助、が、冤、枉、の、ま、の、趣、具、は、あ、く、
 送、恨、は、堪、ば、叔、道、備、は、退、は、く、莊、助、を、拯、べ、死、謀、を、相、譚、折、犬、塚、犬、飼、

辭、等、一、く、吾、侪、共、と、く、行、徳、へ、還、り、て、親、も、人、々、の、り、を、告、す、
 聽、ぞ、し、れ、れ、あ、つ、彼、犬、川、ハ、下、さ、び、も、面、を、あ、い、せ、一、友、を、ぬ、れ、も、同、胞、小、優、
 因果、あ、ん、を、その、大、厄、を、外、中、と、何、処、へ、と、く、還、ら、べ、死、行、徳、無、憂、小、
 あ、つ、火、急、の、大、事、あり、先、莊、助、を、拯、べ、後、小、親、小、告、又、人、々、小、告、も、も、辭、違、祭、
 あ、つ、と、尋、思、を、一、つ、力、を、勤、し、て、終、は、天、川、莊、助、が、必、死、を、其、処、小、拯、ひ、ゆ、か、く、
 異、姓、の、兄、弟、小、を、致、せ、一、小、豈、料、人、や、舊、里、も、亦、暴、風、の、殃、危、起、り、ま、く、
 大、八、の、親、兵、衛、が、往、方、も、あ、つ、彼、人、と、い、彼、処、小、一、箇、の、天、士、を、ぬ、れ、一、箇、の、
 犬、士、と、失、ふ、これ、塞、翁、が、馬、を、ぬ、れ、亦、彼、牧、家、の、牛、小、似、り、これ、ら、の、故、も、
 父、の、物、を、あ、つ、せ、り、一、この、身、の、罪、を、つ、せ、ん、その、り、果、て、も、あ、く、あ、つ、枉、津、
 懸、よ、の、ま、魚、縁、れ、て、け、あ、る、歸、を、あ、つ、け、情、由、を、知、り、あ、つ、
 ぬ、け、け、言、益、知、れ、よ、似、れ、れ、も、先、や、和、主、小、物、く、り、一、當、座、の、心、遣、り、お、入、

萩助ハ如此々々ト暮六龜條カ枉死ノヲアリ犬川莊助ガ主ノ仇ヲ報セリ
 顛末簸上兄弟菴八ホダリ又猪平ガ任俠音音ガ孤忠力ニ尺八ガ精忠
 曳心單節ガ貞操節義也ベク犬山道節ガ君父ノ仇ヲ報ヒ舞大
 犬飼ホト共ト彼人ヲ助け助ラレテ荒茅山ノ奇遇白井ノ大敵ヲ殺シ
 走ると曳心單節ヲ相伴ク合鞍ノ衆ノウケテ馬ヲ替レリ其日ノ怪談
 犬山犬塚ホノ四犬士ト相別トク只當ニ彼馬ノ迹ヲ慕ク日ヲ累後
 遠ク武藏ノ浅草ニテ阿佐谷隈ヲ過テ傷鎗野緒ヲ撞見セ
 石濱ガ千葉ノ權臣馬加常武ホ抑留セられ去歲ノ秋アリ彼首ホ
 辛ク石濱ヲ脱出テ彼墨田河ヲ歩涉セテ事情ハ大坂毛野ガ衆ノ

追んとて大九今朝の爲体まどその要領とり摘とて辭せり説示セ
 依介頼りやうち驚たぐ覺む太息を吐く妻不感嘆一々且く巳額加
 自と解けて叔も危たすやれかあし知られりきのあまも疑ひをいと
 疎あていひに候を磨記義を守り心づけハ格別也及ぶ死すああ
 ありあれども恙か死命ゆき還らせぬをかう伴ひまゆせう僕と面を
 起せ歡びおとせいととの祝壽を述べ小文吾ゆてはるこ圖らぬ和主の資ホ
 よりく舊里近く帰すまあがう隻時親小面をえせぬハ又隻時の不孝を
 とく行徳へ赴けん草履一雙借し人とひひ躬て身を起を依介急推
 禁めての報送せしうもあふ且くあるくは也噫神やぬ方の何をも
 知り心なる歡の種をおう一男もなきが痛痛記を為あがうの
 叶ぬ下條ハ老家公のみなりかとの小文吾宵うち騒たぐと何をも



小文五郎



依久

○附記
 此巻の終りまで
 漢齋英泉回

市川の宿
 依久小文五郎
 管待也

心のわづらひ。とく告よつてせよとせよ。向れて鼻うぢむを御中の言の緒を記
 せり。ぞつて。文五兵衛とぬ。大塚守縁由を知んとて安房は起死をひつ
 妙真との対面して云云と報ゆへに搦ま加し愁歎悲泣は涙ど共進むる
 是より先は里見の殿の螢崎ゆに此如此々とげえおけぬのあり。犬士達の奇
 異天縁親方。夫婦の勇敢義死又坊とののりをも輝し詳し不貞は
 御感尤浅り。たがれは犬江親兵衛が祖母妙真をあらふ留めくを。一りくむ
 扶持せよとて奴婢両三名冊りく。厚く款待しゆひつ。この件の親兵衛が
 存亡を究めく。恙のゆへに四犬士。結成。共侶を多れとある見旨は螢崎
 ゆに命ゆひ。この折は大塚守事之類。ゆえに。ゆへに。又驚たゆへに。あつん
 ゆに十一郎。大法師。再會して大塚大川四犬士の存亡定む。揚向は恙覚や
 否や吉凶共報せよとて此度の究竟の夥兵五七名を行若黨を打扮して。

螢崎ゆは隷ゆへに文五兵衛とぬ。亦松郎と孫の往方を索ん。伴小丸
 ゆとく。只管早るゆへに。妙真との共侶ふとて身の暇を乞ひゆひを里見の
 殿の許しゆへに志のゆへに。行歩不便ゆへに。老人と婦女子をど果しゆへに。
 旅宿をせま。欲するゆへに。功の記のゆへに。是禍を驪する。十一郎を遣せ
 安否をあらゆへに。ゆへに。便をせゆへに。文五兵衛の神餘の忠臣。那古
 七郎由武が弟。ゆへに。傳へゆへに。ゆへに。行徳ゆへに。ゆへに。市の活業。ゆへに。
 本意とせざるゆへに。妙真と共ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。
 老を頭へか宜く扶持してゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。
 文五兵衛とぬ。妙真との共感涙のゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。
 これは是去歳の秋七月下旬のゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。
 妙真との文五兵衛とぬ。と竊に商量しゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。ゆへに。
 一日僕を招ねるて輝如此

如北と示させぬひ。かれば俺們西人の地の逗留限りおれむよりく大江
屋の船家扶い你を送迹お立べ地を休が年来老実のおもは伴を致し
心操よえとありああり勉て家を留れり。船橋の如真が親里ではれども二親
世を遊ゆりより。今いゆら親類中。只水滲といひ一箇の煙あり。いれ
よんがも求むむとを年来疎遠のつら親血をちのつらやあれが休
渠を妻をせう。あつひつと伺ゆ。あひひくひく懇切あるこの告言ふ膽の
漢れて果敢々々あつひ心もほせを畏りくゆいふ文五兵衛と名を宣ふや
妙真刀祢の佳煙あり。これいゆの親族おれどもかかても小文吾入市
人ふあるべくもあつぬを他一人の子を養ふ。古那屋の送迹を立るも要
知。庫をも家扶をも沽却して後安くはらふへ。休をゆく立入りて件の
用意せよ。彼船九郎が支黨のいひするよりかくも。これもありあつる。

俺們の守り守る守をわげなかりて推續なく跡よりおえありぬら彼と
繰返す。諭いあふ流れて言兼あつる話且ひとりお地をちお起て
日かたあふかへり多つ又行徳へも赴けり。文五兵衛さぬの口状を村長とあ
傳へ。小彼処ハ持は穩當さぬこの市川も船九郎が支黨いをはりきり。かくて
一旬おありを歴る程は文五兵衛さぬ妙真さぬ八里見の殿より隸をせぬひ。
若黨奴隸多くぬり行輪を還りぬ。里人驚れ且訝りて巷に立ち上り。
觀るもの多り。かて件の後者ども逗留中とめ措き先船橋へ飛脚を遣し
件の煙を呼とりて云云と示させぬひ。叔僕を故の親方房へあゆ送迹お
あてして煙の中水滲を妻いぬ。村長へありつる休子房八沼藩を世を
をきりて贖孫の大八神懸し。あつひけん中。日より往方おれぬかくも
幸か厄吾侪はゆるよ。あつひ世帯を執賄えぬ。これ依介を養嗣中て

大江屋を譲り侍りぬ吾侪の安房の親族許而三年杖をさめて浮世を
やそく送らんとあひ決め侍るが年加ゆり夫婦のあはれを頼まざると
あふ村長とのも四鄰の人のいづれを異議及べた悼むものあり祝ぐあ
あり授受を提擲す緯立地は整ひ是併妙真と名の元月廣た
洪恩の緯果く文五兵衛さぬ行徳をかへせぬのこれ亦村長との
小文吾のあまき如く市人の所為を嫌へ親の迹を嗣べくもあはぬ渠の
近属鎌倉へよしが求めく赴けられべかり来日の際りかたは已に既
老脱びく活業の懶くありぬ安房の親族小身を任せんと思
のそ就く客店の家扶屋庫共は望する人は活遞与てんこの美をあら
ゆめひ社とありぬへハ異議もあらぬと答らる杖望も早よ
き。商量既更成一く活春の金八百あり五十兩獲ぬとせ

中百金送りゆめて二十金ハ三世の父母并は房ハ沼藪ホが為とく近
寺々へ進ませぬひの三十金ハ里の貧民乞食牛馬に至るまで送る
行に引ぬぬ人會あよむた功德といひけり此は是去歳の秋九月中流の
りふふん彼首も是首もあひのあふ事果うと歡びぬ文五兵衛
ゆふ又この市川は立よりぬと妙真なる待つけくかの暇ある後者を
相將之安房へ還りぬは是よりして後文五兵衛さぬ月丁心機の疲勞
も老病漸々よりあひぬと然とて苦惱の氣色もあはく臥ぬへより
枕あがらぬこの一守りびえりる醫師も命して療養の術を尽こ
あへども命數既り限りぬればや病むとあはれも癒りぬと妙真なる
憂ひて等閑なる看とりぬ不頼とせぬとあはれけんこの春二月の
初旬子あへ花脚を立さしてあうくと告ぬぬ元消息は驚ぬ物も

飛脚と共の日。お安房も着て。妙真の呼入れて。詳に告ぐ。胸の病林も近つて。とのおやを訊ませ。小文五兵衛も。依介との飲よくを。つれ誘あへて。間近く。枕を奉て。宣入。某老病身は。通れば。對面も。此度を。限り。見小文吾孫親兵衛が。存ても。あつて。長記別れ。なり。お安房も。つれ。お安房も。伏姫。う。不。過。世。ある。八行八字。八犬士の。隨一人と。お安房も。鬼神も。敢害。況。怒。敵。残。賊。も。亡。つ。べ。く。も。あ。つ。て。一。旦。不。幸。や。と。窮。院。の中。あり。と。い。ふ。と。も。八。人。具。足。あ。つ。て。日。子。里。見。殿。は。仕。へ。あ。り。と。名。を。揚。家。と。起。さん。と。大。く。違。ふ。べ。く。い。ふ。愚。按。の。と。く。あ。つ。て。六。渠。ホ。の。遠。く。父。祖。も。優。れる。未。然。の。功。徳。を。り。来。り。て。親。を。安。ら。不。養。り。り。里。見。殿。は。值。偶。せん。や。去。歲。の。秋。より。國。守。は。洪。恩。奴。婢。と。これ。被。隸。され。坐。して。食。ひ。織。を。衣。も。且。暮。も。不。足。あ。つ。て。

の。心。地。常。あ。つ。て。初。より。各。醫。良。藥。何。れ。と。く。恩。命。を。り。下。さ。る。真。加。あ。つ。て。感。涙。袖。濡。ら。せ。日。ぞ。ま。り。け。り。然。る。と。餘。命。を。全。り。て。この。世。の。名。残。を。惜。ま。ん。と。あ。つ。て。既。六。十。は。あ。つ。て。ぬ。あ。死。時。と。覺。る。小。文。吾。の。後。は。も。親。の。終。焉。は。あ。つ。て。と。憾。を。せ。と。傳。へ。て。さ。る。像。見。は。か。れ。も。行。徳。勿。家。を。售。る。一。包。の。金。あ。つ。て。小。文。吾。が。恙。も。あ。つ。て。彼。友。達。と。共。侶。も。あ。つ。て。日。の。あ。つ。て。長。記。旅。宿。も。借。財。の。債。を。と。も。あ。つ。て。此。の中。の。拾。金。は。和。殿。へ。紀。念。に。進。も。つ。る。その。餘。は。小。文。吾。が。物。不。れ。時。至。る。と。和。殿。も。預。置。之。と。い。ふ。送。言。細。や。り。け。れ。た。と。慰。め。り。て。塞。胸。の。苦。も。立。ち。ま。つ。て。え。ん。れ。ば。側。子。を。い。せ。妙。真。も。涙。も。咽。ば。泣。き。を。袖。に。包。も。て。立。あ。つ。て。日。より。し。て。看。病。も。逗。由。一。旬。あ。つ。て。経。る。その。二。月。の。十五。日。小。文。五。兵。衛。も。苦。痛。も。あ。つ。て。睡。れ。る。と。く。息。絶。ゆ。ひ。ぬ。佛。滅。涅槃。の。會。日。も。稱。終。焉。は。いと。愛。と。あ。つ。て。あ。つ。て。

あまのあまを先々といひうけて包を解けく十金と更も又十金を加えく依介の
 こけ与へこの十金ハま親の送言ふ任事のも又十金ハ某が墨田河也也り
 かく資とゆゑる薄美を受取ゆひひといふを依助せあへむそのおひかけ
 なほり之文五兵衛の賜り十部金の金とされかまきこの十兩ハ要
 知と辞めを小文吾推返しつ辭を盡して薦りて依介ハやうやく受
 戴つ妻もろ共ハ歡びをか述よける當下又依介ハ妻を側ハ進んで哺
 犬田の郎公おま嚮ままうつる妙真の姪女船橋おひひを僕ハ妻せあひ
 その名を水滸と呼れり。おん目をあひいへうといふ小文吾領せく名をの
 豫くやどお折れり。おん対面してよ懸く歡びも。下入をいへ重縁とい
 相応ハ當家の新婦ありあへば沼蘭がうさへおひひの妹あへる心地を
 勉之内と治めあへとあろ隔ぬ心奮ふ水滸ハ顔うち極めて先小文吾が安

ひ。否と諮ね且文五兵衛が悼亡を述く又妙真が薄命と解せくおひひ
 少も六依介要時沈吟して郎公ハ何と名召らんあまを還りあひ甲斐は
 安房へ赴れあひひは多公の墓へ詣てく妙真のあまを慰く。下は
 彼處へ参りあひ里見の殿のおん歡びのあまを想家らるあれ僕ハ伴任
 以ん近江おひひ立あひひといふ小文吾頭を掉くつてやう安房へゆくべ
 里見殿の恩徳を仰げあひひ高く高けれども同因果の友具足せ況てこが
 預りたる鬼ハ單節を失ひあひひその存ことをいまごゆあは恥有く且功
 知れ親の墓系のせまぬきとて阿容々々として彼地不到ら友と慕
 背けく栄利を急ぐと人食いんもれ亦あひひあれが且くあふ返西と親の
 中陰を送急し。さるとして竊ハ消息して妙真とのへ報知せあは後々あひひと
 怨人必多言まてと禁めく申の比及より笠あひひく行徳あり。

香華院かぐわいんに赴おもむけ、おのりの廻住持まわぢうぢと對面たいめんして文五兵衛ぶんごべゑが菩提ぼだいの為ためにあふも石
 塔いすゞを建たべたると月忌つきぎ年忌としぎ不當ふたうる毎ごとに二親ふたおやの追薦おしせん讀經よみきやうと叮嚀ていねいを頼たのむ
 物もの多く布施ふせしけり。又また小文吾こぶんごの次つぎの日ひより喪もは籠かごまゝ七日ななひ々々々々の忌日きじつ毎ごとに
 此度このたび行徳ぎやうとくを建たてりける。親おやの墓はかに詣まがる程ほどもあつても五十日いそひの中陰ちゆういんの圖ずり既すでに
 だつとあひいへ依介よけ夫婦ふうふを告別こくべつして今いまを改達かいたつまう人ひとをよめりし事も妙真めうしん
 の稱なづふ巨細きよせうを告つぐ。慰なぐさめよ小文吾こぶんごがして也や。親おや兵衛べゑも恙やを存ぞんへ。八箇はつかんの犬士けんし
 相あ遇あひ日ひは見けんまふ入いるべし。みづう愛あいしく俟まちひ孫まごと傳つへよりしといひ
 果はて往方かうも定め終はつて西にしを依介よけ夫婦ふうふの苗なめりて里さと盡またまで送おくりなす。
 畢竟ひつきやう小文吾こぶんご市川いちがわの旅宿りよどと去さる。又また甚おろしき説話せつわあるといふ次の巻まきは
 解と分くるを見て知らん。

里見八犬傳第六輯卷之四終

